

東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 2025
オンライン研修「多様性が活かせることばの教育 2025」 報告

趣旨

文化間移動をした子どもたちが、その多様性や出身国・地域等での経験を活かし、学級・学校・地域社会の一員としてその力を発揮できることばの教育について考える場として、「子どもたちの多様性が活かせることばの教育」をテーマに、2種類の研修を実施する。新たな視点とアイディアで、学びの場・内容と活動、そして支援のあり方を議論し、かれらをエンパワーメントすることばの教育について具体的に構想することを目的とする。

研修Aでは、高等学校における日本語学習支援に関して環境づくりという視点から捉え直して学ぶ。研修Bでは、子どもたちが成長・発達を十全に送るための教育のシステムを考えるために、幼・小・中・高での学習の連続性を意識したことばの教育について検討する。両研修とも、テーマに関連する情報の提供（講義）・現場の取り組み実践例・参加者間の交流／ワークショップで構成する。

I 研修A「多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり」

くねらい>

高等学校において「特別の教育課程」による日本語指導の制度化が施行されて3年目を迎えた。外国人生徒等が、共生社会の一員として自己を実現するためにも、この制度を利用して日本語指導の充実を図りつつ、その学習を教科学習、キャリア形成、社会的活動への参加等に関連付けて、自己を開拓するための力を育むことが期待される。

研修Aでは、多様な言語的文化的背景をもつ生徒たちが自分の未来を切り開き、社会参画するためのことばの教育・支援を検討する。それには生徒自身が、自分がもつ潜在的な力に気づき、さらにその力を能力として開拓できる、つまりかれらをエンパワーメントすることが重要である。本研修では「日本語指導」を、外国人生徒等が、その多様性を活かして主体的に参加し、新たな価値を創造する「ことばの学習」のための「学習環境のデザイン」という視点で捉えなおす。学習環境を、「活動」「人工物（教材・教具等のリソース）」「コミュニティ（共同体）」の3つの側面からいかにデザインするか、事例や現場の取り組みをもとに具体的に学ぶ。

1 研修A 報告

(1) 第2回研修 概要

日時	2025年7月6日（日）10:00 - 12:30
主たる受講者（対象）	高校で学ぶ外国人生徒等、および高校生相当年齢の子どもに日本語指導・学習支援等の支援を実施している教師・支援者等
テーマ	「ことばの学習のリソース」をデザインするー学習環境の視点から
ねらいとする資質・能力※	＜捉える力＞ ウ 子ども言葉の力を、日本語と母語の両言語を視野に入れ、言語能力の多面性に留意して測定したり評価したりすることができる。

	ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。 <育む力> ス 子どもの日本語の力を考慮して教材等を選んだり作成したりしてリソースを準備し、学習参加を促すことができる。 <変える力> ヒ 子どもが自身の多様性を支援にして活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
研修内容	1 学習環境デザインの考え方で、「日本語指導」のためのリソースを取り上げて検討する。リソースを、日本語を理解しその知識を得るのみならず、学習者が能動的に働きかけて新しい意味や価値を見出したり、学習者が活用して新しく創造するものととらえ、具体的な事例をもとにリソースの活用や作成を考える。 2 「特別の教育課程」による日本語指導を実施している東京都立杉並総合高等学校が、具体的な指導体制や指導内容について報告する。
事前学習課題（参加に当たって）	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『高等学校における日本語指導の制度化 「特別の教育課程」としての編成・実施について』 <1> 基本的な考え方と制度の解説 <2> 「特別の教育課程」として日本語指導の編成・実施のポイント <3> 高等学校における日本語指導の現状と課題

※文部科学省 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

（2）研修 A 第2回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	・研修趣旨のスライド資料 参考文献：山内祐平（2020） / 文部科学省（2020）
②講義 「生徒それぞれに応じたリソース」	・高めたい力とリソース ・教科書以外のリソースの考え方と活用事例	参考文献：本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 ・深澤・本田（2019） ・『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』 ・『できる日本語初級・初中級』 ・『新版聞いて覚える話し方日本語生中継』 ・『改訂版中級からはじめるニュースの日本語聴解40』 ・『Intermediate Kanji Book vol.2 第4版』
講義「リソースとしての教科書」	・教科書のねらいとシラバスの種類 ・構造シラバスの事例 ・技能シラバス、機能シラバスの事例	
講義「既存の教科書をクラスに応用するには」	・既存の教科書をそのまま使うことの難しさ ・対応のポイントと具体的事例 ・留学生向け授業で実際に使用されたリソースと実践例ー教科	

講義「リソースの実践例」	書を用いた事例と教科書以外の事例	講師作成スライド
③事例報告	報告：「特別の教育課程」による 日本語指導実施校の取り組み 東京都立杉並総合高等学校 教諭 上園 美弥氏 質疑応答： 口頭で・チャットへ書き込みで	グループ活動の課題
④グループワーク 「ご自身が使用した教材・教具について」	小グループで話し合い ・自己紹介 ・どのような生徒にどのようなねらいで、どのような活動で、どのようにどんな教材・教具を使用したか	1. ご自身が使用した教材・教具について、次の内容について紹介しあってください。 ①対象の生徒は(出身国・地域、滞日歴、学習上の課題)? ②どのような日本語の力を高めることをねらいに? ③どんな活動で、どのように利用したのか? ④教材・教具の利用による成果は? 2. 紹介した教材の情報を、Padletに、ご記入ください。
⑤振り返り	アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用 アイディア ・資質・能力の向上の有無	
参考文献・資料 ・山内祐平 (2020)『学習環境のイノベーション』ミネルヴァ書房 ・文部科学省 (2020)『教育の情報化に関する手引きー追補版ー』 : https://www.mext.go.jp/content/20200707-mxt_jogai01-000003284_011.pdf ・深澤のぞみ・本田弘之 (2019)『日本語を教えるための教材研究入門』くろしお出版 ・本ユニット (2023)「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf 教科書 ・スリーエーネットワーク編 (2013)『みんなの日本語初級Ⅰ 第2 版本冊』、スリーエーネットワーク編 (2012)『みんなの日本語初級Ⅱ 第2 版本冊』スリーエーネットワーク ・嶋田和子監修 (2024)『できる日本語初級第2 版』『できる日本語初中級第2 版』アルク ・ボイクマン総子・小室リー郁子・宮田敦美 (2024)『新版聞いて覚える話し方日本語生中継初中級編1』くろしお出版 ・瀬川由美・紙谷幸子 (2022)『改訂版中級からはじめるニュースの日本語聴解40』スリーエーネットワーク ・加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智・平形裕紀子 (2014)『Intermediate Kanji Book vol.2 第4 版』凡人社		

3 成果

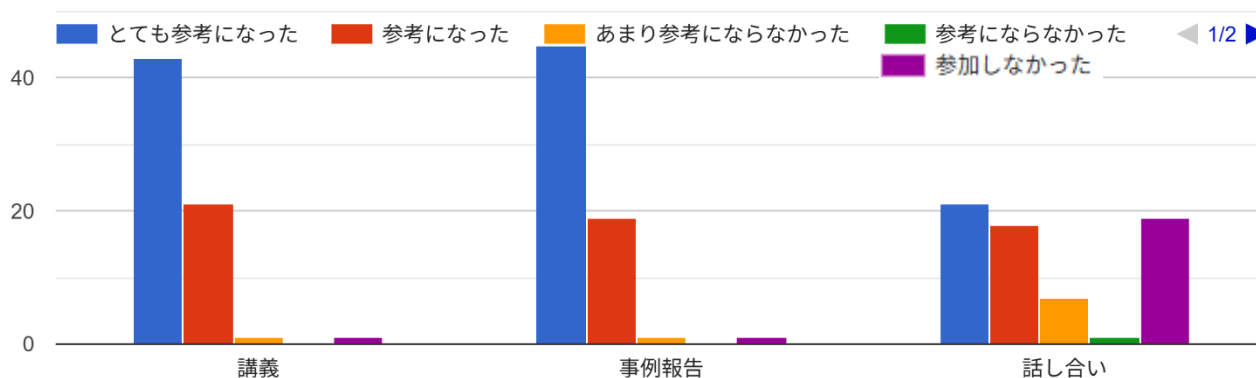
参加申し込み数：131 当日参加者数：119 アンケート協力者数：66 (回収率 55.5%)

<アンケートより>

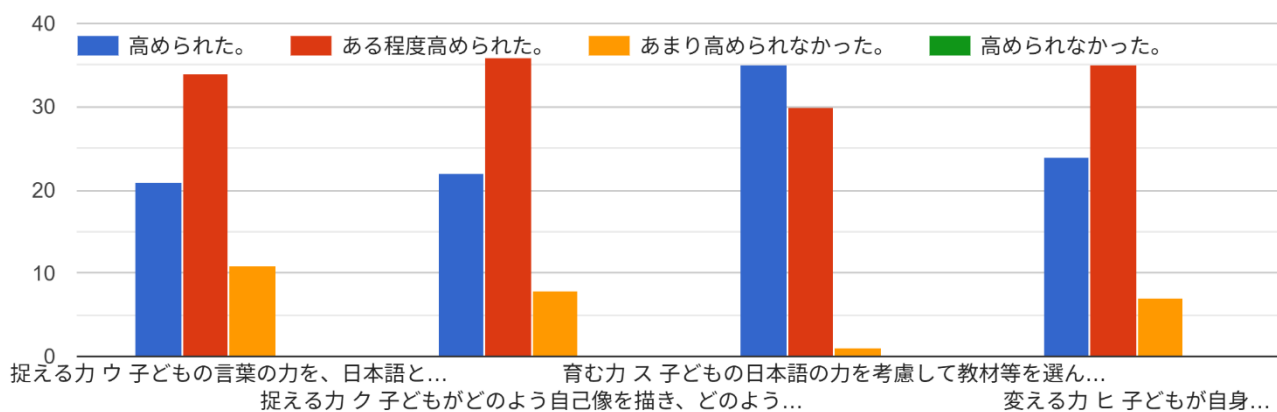
① 参加者の背景（立場）



② 満足度「参考になったか」



③ めあてとした資質・能力の向上について



④ 寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

- ・担当科目の年齢層や目的や形式が異なりましたが、だからこそ視野が広がる場所もあり一つのお話が私自身の貴重な学びになりました。
- ・講義では、具体的な教材を使って具体的にどのような活動ができるかの提案があり、参考になった。事例報告も内容が非常に具体的だったので、自分の勤務校との違いを照らし合わせながら聞くことができた。また、話し合いも、具体的な教材名のほか、生成 AI の活用の仕方など、今まで自分が考えていなかったようなアイディアをもらうことができた。

・特に杉並総合高校での取り組みを具体的に知ることができたことです。日本語指導の仕組みができており、本校でも取り組みたいと思いました。生徒が卒業までにどのような日本語指導が必要か組織として明確にする必要性を感じました。
・リソースの活用例や実践例、多読の実践など取り組みそうな活動の紹介が参考になりました。
・時間的制約を教材の内容を省いて克服していくという考え方。
・実際の高校での取り組みを具体的に知れた点。また、社会参加を視野に入れた授業についてあまり意識できていなかったと感じたので、具体的な取り組み案を提示していただけて大きなヒントとなった。
・講義では、リソースのデザインとしての教材について、具体例も示しながら説明があり、理解が進みました。事例報告では、具体的に高校での日本語指導の体制や教育内容がわかり、そこでの工夫が参考になりました。話し合いについては、十分話すことはできませんでしたし、皆さんがリソース、教材を探している段階で、これはいい、という紹介はなかったのですが、高校生の段階でも読んで情報や内容を理解したり、作文や発表を通して自分の考えを伝えるという力が十分ではないことが課題として挙げられました。

⑤ 「特別の教育課程」の実施について（高等学校所属 36 人中）

回答済み	: 19 人
「特別の教育課程」を実施	: 7 人
「検討中」	: 2 人
実施は「難しい」	: 6 人

<現状について>

実施しているとの回答から

- ・今年度の入学生には、学校設定科目として 1 年次三単位、2 年次三単位、4 年次二単位で実施。
- ・定時制・単位制の高校で、特別の教育課程として「特別日本語」を設置している。対象は、プレースメントテストで 60 点に満たなかった生徒（この分け方には課題が残る）。火曜 78 限、木曜 910 限、金曜 34 限に設置しており、生徒は都合の良い時間を選択して週一回受講する。教師が各曜日二人おり、レベル分けして担当しているが、各曜日・時間によって生徒数に大きくばらつきがある。火曜日の上のクラスは 20 人弱とあまりにも生徒が多く、TT で講師を増やした。

「検討中」との回答から

- ・教育委員会は高校に特別の教育課程のやり方を説明にきているが、高校内に、日本語のための専任がいらないため、二の足を踏んでいる。当高校が、特別枠を作ることに至ったさいに、今までのやりかたのまま、という前提で受け入れたようなので、特別な教育課程をすることを前提にしていない。しかし、ダイレクトへの生徒への授業が週 1 回の 2 コマで、放課後支援も 30 分の 1、2 回では出席率がどんどん落ち、課題となっている。そのため、多文化教育コーディネーターを派遣している NPO は、教育委員会に、特別の教育課程を設定するためのガイドラインを作成するように勧めているところです。

実施は「難しい」との回答から

- ・「特別の教育課程」にしてしまうと、個別の指導計画など、書類作成が異常な量となり、現時点で加配なしで、現場の教員のみに負担が増えている状態の本校では、現実的ではないと考えます。
- ・学校設定科目として「日本語」が作られ、成績表に「日本語」の単位が載ることになったが、放課後の日本語教室の形態や支援体制は変化なく自分一人での運営になっている

＜企画・実施者の所感＞

アンケートでは、おおむね好評価であったが、資質・能力の向上については特に「育む力 ス 子どもの日本語の力を考慮して教材等を選んだり作成したりしてリソースを準備し、学習参加を促すことができる」で高い向上の実感が得られており、講義との関連が強く感じられた。講義では、リソースを学習デザインの考え方でとらえるという理論的な面だけでなく、理論（考え方）と結びついた具体的な実践事例や対応例を示したことにより、参考になったという意見が多くみられた。

また、杉並総合高等学校での取り組みの報告では、日本語指導の枠組みだけでなく、具体的な授業内容、使用教材や、それらに関する様々な具体的工夫が紹介された。具体的な工夫を知ることにより、参加者が「自分もやってみよう」と感じてくださっていることが、アンケートからも把握できた。

講義と取り組み事例の報告の後には、グループワークによる話し合い活動も行った。しかし、その直前に zoom から退出してしまわれる参加者も多く、オンライン研修におけるグループワークの難しさを改めて実感した。一方で、参加してくださった方からは、時間が足りないという声もあるほど、各自の使用教材・リソースの紹介は内容の濃いものとなった。各グループが出た意見を Padlet に書き込むというステップを踏んだが、他のグループの話し合いの結果を見たい、という意見も見られるほどであった。参加者が様々な場所から状況に応じて参加できるオンライン研修の良さと、参加者の相互交流をともに実現していくべく、今後も工夫をしていきたい。

改めて、取り組みをご報告くださった上園先生、そして参加者の皆さんに感謝申し上げます。

4 資料(URL にアクセスすれば、ダウンロードできます)

- ① 講義 日本語学習環境としての「教材・教具等（人工物）」のデザイン
小西円 東京学芸大学
- ② 報告資料 上園美弥都 立杉並総合高等学校

Ⅱ 研修 B「幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育」

＜ねらい＞

多様な言語的文化的背景をもつ子どものことばの教育では、心身の成長発達や子どもたちを取り巻く環境をふまえながら、来日初期から子どもたちが自分らしく、もてる力を十全に伸ばしながら成長するための教育を実現することが重要である。本研修では、幼・小・中・高の各教育段階で子どもの発達の状況に応じて教育内容・方法を探るとともに、長期的な視点で校種間の学びの連続性を保障する教育・支援について考える。学校でのスムーズな受け入れとその体制づくり、文化的な適応や地域支援との関わり、そして、初期段階のコミュニケーションから教科学習、そして自己実現のための日本語の力の育成を目指す日本語指導について、考え方を知り、教育現場の実践事例を通じて理解を深める。さらに、ワークショップ型の活動を通して、明日からの指導・支援に生かせるようアイデアを具体化する。内容は、初めて日本語指導を担当することになった教師や支援活動を始めた支援者を主な参加者として構成してある。

なお、参加にあたっては、本ユニットが作成した動画（参加者限定公開）の事前視聴による事前学習を求める。

1 研修 B 報告

(1) 第2回研修 概要

日時	2025 年 7 月 6 日（日）13：30 - 16：00
主たる受講者（対象）	「今年、初めて」、「まだ、経験は数年」という日本語指導・支援に携わる学校教員・支援員・支援者の方
テーマ	探究する力・自律的に学ぶ力を高める日本語と教科の統合学習
ねらいとする資質・能力※	＜育む力＞ コ 第二言語習得や教育方法に関する知識を踏まえ、子どもの年齢的な発達の違いを考慮した日本語や教科の指導・支援をすることができる。 サ 日本語に関する知識を生かして、子どもの日本語の力に合わせた日本語や教科の指導・支援をすることができる。 ス 子どもの日本語の力を考慮して教材等を選んだり作成したりしてリソースを準備し、学習参加を促すことができる。 セ 学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容（教科等）と日本語を統合した指導・支援をすることができる。
研修内容	1 講義 子どもへの日本語教育について、第二言語習得や学習言語能力と生活言語能力の違い等の基礎的事項を踏まえた上で、成長段階に応じた子どもの探究する力や学ぶ力を高める「日本語と教科の統合学習」、「JSL カリキュラム」（トピック型と教科志向型）の授業づくりの基本的考え方を学ぶ。 2 事例報告 目黒区立東根小学校日本語国際学級・浜松市立浜北北部中学校初期日本語指導拠点校にじ「浜北教室」の小学生および中学生を対象とした「日本語と教科の統合学習」の実践例から、授業づくりの具体や考慮すべき点等について学ぶ。 3 グループワーク ①2つの事例報告から新たに学べたこと・参考にしたいと思ったこと ②日本語と教科の統合学習について、まだよく分からないことや疑問を共有し、理解を深める。

事前学習課題 (参加に当たって)	次の研修用動画の視聴 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット (2025)『初めて教える人のための 田中先生と学ぶ子どもの日本語指導』 講座3 子どもたちの日本語教育 パート3 「日本語のコース設計」 パート5 「母語と第二言語の関係」 パート7 「学習言語能力をのばすために」 講座5 教科学習への参加を促す教育の実際 パート1 「JSL カリキュラム」(日本語と教科の統合学習)
---------------------	---

※文部科学省

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」(日本語教育学会 2019) にもとづく

(2) 研修 B 第2回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	研修趣旨のスライド資料
②講義「成長段階に応じた学ぶ力を高める日本語と教科の統合学習」 1. 子どもの日本語教育とは	・「子どもが日本語を学ぶということ」とは ・子どもにどのように日本語を教えるか? ・年齢による学び方・教え方の違い ・学び方の違いの背景: 子どもの言語習得ー母語と第二言語の関係 ・年齢で学び方にどんな違いがある? ・生活言語能力と学習言語能力の違い	講師作成スライド 本ユニット (2024) / 齋藤 (2011) / 文部科学省 (2019) / 中島 (2016)
2. 日本語と教科の統合学習 (JSL カリキュラム) とは	・なぜ日本語と教科の統合学習が必要か ・日本語と教科の統合学習ー「JSL カリキュラム」とは ・「JSL カリキュラム」の開発・目的・特徴 ・「JSL カリキュラム」の二つのタイプ ・トピック型 JSL カリキュラム ・教科指向型 JSL カリキュラム ・日本語支援5つの視点 ・JSL カリキュラムいつ始めるか ・授業づくりの基本的な考え方 ・取り出しの位置づけと JSL カリキュラム ・日本語の目標をどう設定するか	文部科学省 (2003) / 文部科学省 (2007) 東京学芸大学国際教育センター (2022)

3. まとめー授業づくりのポイント	・1 子どもの実態に合わせて ・2 探究型の学習活動を通して ・3 基本構造「内容理解」から「日本語で表現」	
② 事例報告 日本語と教科の統合学習 ④グループワーク ⑤振り返り	報告1：ことばの力で学びをひろく～にじ「浜北教室」における日本語と教科の統合学習の事例～ 浜松市立浜北北部中学校・初期日本語指導拠点校・にじ「浜北教室」・教諭 佐々木しのぶ先生 報告2：在籍学級の学習活動につなげる日本語指導～光村図書2年(上)「たんぽぽのちえ」におけるJSLカリキュラムの考えに基づく授業実践～ 目黒区立東根小学校日本語国際学級・主幹教諭 田中寛子先生 質疑応答： 口頭およびチャットへ書き込みで グループワーク グループ（4人前後）： ① 2つの事例報告から新たに学べたこと・参考にしたいと思ったこと ② 日本語と教科の統合学習について、まだよく分からないことや疑問を共有し、理解を深める。 アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用のアイディア ・資質・能力の向上の有無	講師作成スライド 講師作成スライド
参考文献・資料 ・東京学芸大学国際教育センター（2022）『日本語指導が必要な子どもによりそうために』今澤 悌「第2章 JSL カリキュラムの授業づくり」 ・齋藤ひろみ他（2011）『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』凡人社 ・東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『【研修用動画】初めて教える人のための 田中先生と学ぶ 子どもの日本語指導』 ・中島和子（2016）『バイリンガル教育の方法 完全改訂版』アルク		

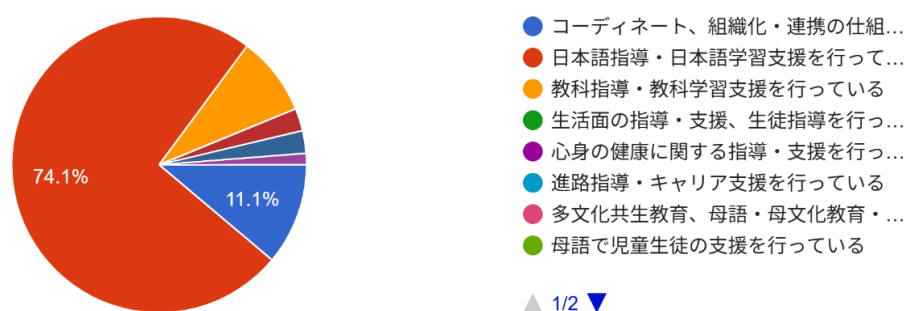
- ・文部科学省初等中等教育局国際教育課（2003）『学校における JSL カリキュラムの開発について（最終報告）』
- ・文部科学省初等中等教育局国際教育課（2007）『学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）開発最終報告書』
- ・文部科学省（2019）『外国人児童生徒の受入れの手引き（改訂版）』

3 成果

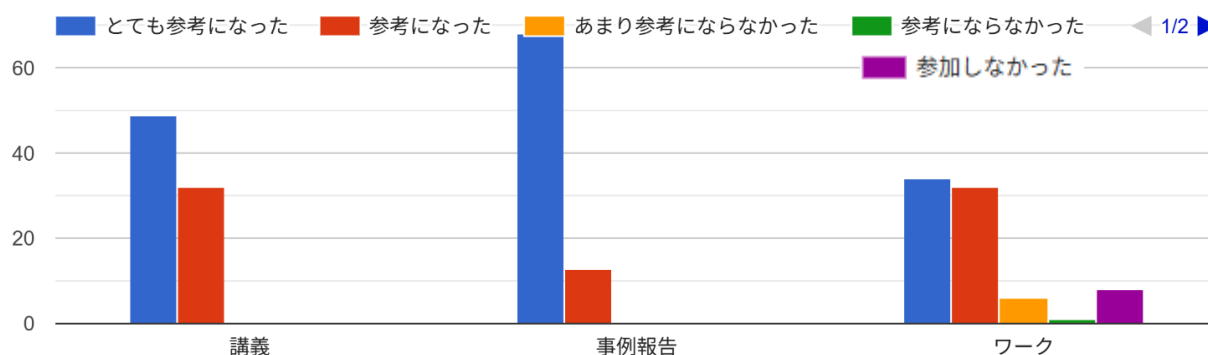
参加申し込み数：135 当日参加者数：116 アンケート協力者数：81（回収率 69.8%）

<アンケートより>

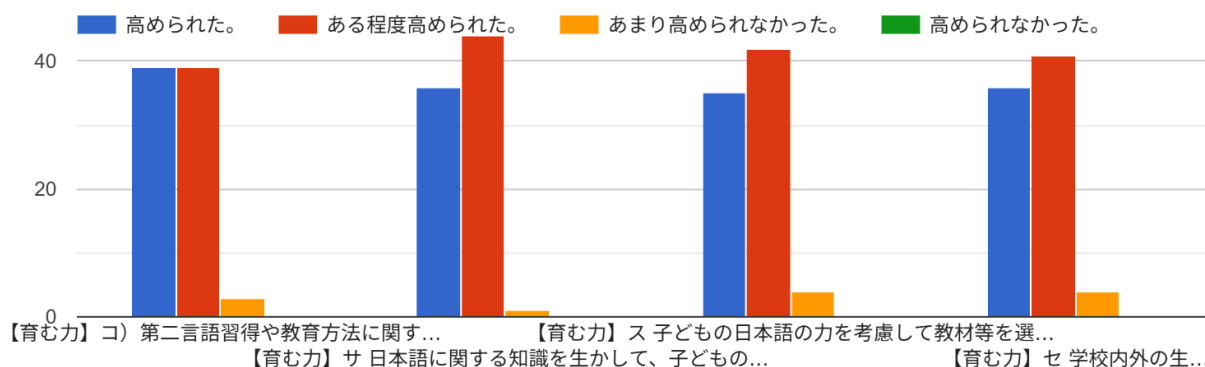
①参加者の背景（立場）



②満足度「参考になったか」



③めあてとした資質・能力の向上について



④寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

・日本語と教科の統合学習について具体的な実践例を紹介していただき、グループワークではそれについて話し合うことができたのは大変良かったです。
・実践例がたいへん素晴らしく、自分のやり方について足りないところを再認識することができた。また、新しいアイデアについて色々とヒントを得ることができた。
・ワークで、聞きっぱなしにならなかった点。振り返りになった。
・異学年で日本語と教科の統合学習を行うために、教科の指導計画を確認し、日本語や教科の目標を分け、指導することができるという点が大変参考になりました。最終的に、日本語で表現していく力をつけるために、個別に必要な力をみとり、支援することが必要だとわかりました。その支援が、学年相応の思考を育てていくことだと改めて感じました。
・発表が素晴らしすぎます！ぜひ、自分の地域の先生方にも紹介したいと思いました。
・教科につなげる内容を、年間計画を見ながら縦横に見て、先々に生かせそうなものを優先的に選んでいく、という考え方。
・事前配信動画と講義は理論が簡潔に具体的に把握できて大変参考になりました。事例報告は素晴らしすぎて、自分の地域の遅れを改めて知らされました。実現に向けてどのようにアプローチすればいいのか、難しさをより感じてしまいました。このような研修に、行政での教育関係者がもっと参加してもらい、聞いてもらいたい実践報告でした。
・教科学習と日本語学習の統合については、いつも子どもたちの在籍学級での学習内容に合わせなければならないという思いばかりがあり、手探りばかりが続いています。が、今日のお話を伺って当該学年の教材ばかりを使わなくてもいいんだ、というのは目からうろこでした。その子に合った統合学習教材を使いつつ、在籍学級の学習に合わせた学習も、（少しでもその子が学級の学習活動に参加できるように）並行して取り入れていくことができるのではないかと思います。

<企画・実施者の所感>

2025 年度研修 B は、昨年度と同様に、子どもの日本語教育・支援が初めての方から比較的経験の短い方を対象に全 3 回で企画しています。子どもたちの心身の成長発達をふまえながら、学びの連続性を意識することで、子どもたちが持てる力を十全に発揮して自分らしく過ごすための支援の姿勢と具体的教育の内容・方法を、講義・事例報告、参加者同士のワークを通して学んでいきます。

第 2 回の研修は、「探究する力・自律的に学ぶ力を高める日本語と教科の統合学習」をテーマに企画・実施しました。参加者には、理論編として、基礎的な理解を促すために、事前に本ユニット作成の動画を視聴してもらいました。講義ではそのポイントを振り返りながら、「日本語と教科の統合学習」について、文科省で開発された JSL カリキュラムを基に、その基本的な考え方と授業づくりのポイント、来日後のできるだけ早い段階から日本語と教科の統合学習を行っていくことの重要性についてお話ししました。

続く実践編では、2 名の先生に事例報告をして頂きました。まず、事例報告 1 では、浜松市立浜北北部中学校初期日本語指導拠点校にじ「浜北教室」の佐々木しのぶ先生に、来日直後の初期指導の段階の、まだ日本語の力が十分に育ってない段階でも、児童生徒のできることから、教科学習の内容とつないだ、日本語教育・指導が可能であるという実践例をご紹

介頂きました。特に、小学校高学年や中学生は、既有知識、獲得している概念、母語、英語等を活用することで、来日直後から、教科の内容とつないで、日本語の指導ができることを教えて頂きました。指導時間が限られている中では、様々な教科に関連づけて教科横断的学びをつくることも有効であること、また、児童生徒の自律的に学ぶ力を育てるためには、教師がすべてを手厚く手助けするのではなく、児童生徒の実態に応じて少しずつ難しいことができるようになるための「足場かけ」の工夫をすることが重要であることについてもご教示頂きました。

次の事例報告2では、おしゃべりができるようになった児童に対する在籍学級での教科学習につなぐための「日本語と教科の統合学習」の実践例を、目黒区立東根小学校日本語国際学級の田中寛子先生にご紹介頂きました。ご報告では、小学校2年生の国語教材「たんぽぽのちえ」を2年生だけでなく、説明文の利点を活かし他学年の児童にも有効な教材として、異学年の少人数グループの児童に対して活用している点、たんぽぽを題材としていることから、実際にたんぽぽの観察をする探究的活動を行い、観察の方法や観察カードの記入の仕方等を取り入れ、理科や生活科の学習、探究的な力の育成につないでいる点、オノマトペをゲーム感覚で楽しく学べる活動を取り入れて、語彙を増やす工夫をしている点等、一つの教材を児童の学年段階や児童に今必要なことばの力に応じて、多様な学びにつないでいく視点がとても参考になりました。そして、佐々木先生のお話からも、田中先生のお話からも、まずはひらがなを覚えてからでないと教科学習に進めないというのではなく、来日直後でも、児童生徒がこれまで学んできたことを活かすことで、例えば、算数の計算を学んでいれば、記号と共に、先に、たす、ひく、かける、わるということばを教えることで、算数の授業に参加できることにつながる、在籍学級でお客さんにならない工夫ができる、という点が共通して印象的でした。

事例報告の後は、少人数グループに分かれて、実践から何が学べたか、わからないことは何かについて、話し合いました。こうした参加者同士で意見交換することで、さらに「日本語と教科の統合学習」について、理解が深まったことがアンケートの回答から窺えました。

4 資料(URL にアクセスすれば、ダウンロードできます)

①講義資料 [見世千賀子 東京学芸大学](#)

②報告資料 [目黒区立東根小学校日本語国際学級 田中寛子](#)

③報告資料 [浜松市立浜北北部中学校初期日本語指導拠点校にじ「浜北教室」佐々木しのぶ](#)